

令和5年度

第1回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和5年5月19日（金） 14:30～16:30

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会会長
安藤久美子（京都府丹後教育局長）

丹後「子育て」サポート協議会顧問

杉岡秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）

丹後「子育て」サポート協議会委員5名

多々納智（京都府宮津天橋高等学校 教諭）

野木俊宏（京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長）

櫛田啓（社会福祉法人みねやま福祉会 たらす峰夢施設長）

関奈央弥（合同会社 tangobar 代表社員）

廣野美穂（与謝野町中央公民館 公民館主事）

各市町教育委員会担当者

事務局（丹後教育局）



4 協議の概要「令和5年度の協議対象の焦点化について」

(1) 子どもの自立につながる、小・中学校時期に必要な経験や体験とは？

① 効果的な自然の中での体験活動

- ・信頼度の高い幼児期についての論文があり、常に変化する自然空間の中で、特に空間認知能力が向上することを示している。自然体験の効果として信頼できる。
- ・自然体験活動などの非日常は、日常を強化し、そのつながりの中で、子ども達の世界観が広がっていくのではないか。（例 キャンプでロープワークを学んだ子どもが、普段の遊び方にその学びを生かし、日常の遊びの発想を広げ、質を向上させていく。）
- ・低学年では、自分自身で何をしたいか提案し、責任をもって、準備から自分たちで実行する自然体験活動を実施している。そして、高学年では、自分たちで計画的なお金の使い方も含めた1週間の計画を立てて実践するキャンプを実施している。どちらも、計画を立てるなど「自ら考える」体験と対話の機会を設定することで効果的に自立へとつながっていくのではないか。
- ・子どもの自立を考えることと子どもの主体性はセットだと考えられる。例えば、雨の日に子どもが水溜まりに入っていく行為が、子どもにとっては楽しいこと。しかし、大人は「濡れない」ということへ意識が向かう。そういった子どもの衝動性について、教育では悪に捉えられているように感じるが、生きる上で、衝動性は主体性につながる。

② 丹後地域の子どもと体験活動

- ・子どもの体験活動について、家庭の所得によって経験の格差が大きいという報道があった。丹後の景気の実態を考えると、丹後の児童生徒には、体験活動が足りてないのではないか。
- ・丹後の大人達は、豊かな自然があれば、意図せずとも自然が学べると思っているのではないか。
- ・丹後の子どもにとって自然体験は、近くて遠いものになっている。例えば、田植え体験に来られた神戸の幼稚園児と丹後の子ども達の様子を比べると丹後の子ども達は慣れていない。丹後には豊かな自然があるが、そこにあるからといって触れられるものではない。

③ 大人が設定する環境とその現状

- ・今の体験活動には、大人のお膳立てが過ぎるものが多い。段取りや準備など全て大人が準備した体験となっていて、子ども達が考える体験にはなっていないものが多いのではないか。安全面にも十分過ぎるほどの配慮をしながらの運営となっているのが実態。そういったことが、甘えを生み、自立の妨げになっているのではないか。
- ・体験活動に限らず、解決の方法を大人が設定し、解決まで導いてしまう。大人が環境を設定するときに、子ども達が主体的に考えながら活動することを奪ってはいけない。

④ 丹後の子どもの体験活動への参加機会減少とその背景

- ・3年生くらいから習い事が増え、PTA行事などへの参加減少の事例がある。習い事をさせない親もいるが、親も子も意欲がないと体験活動へ参加しないのではないか。
- ・丹後の学校教育現場では宿泊体験が減っている。自然体験の重要さは分かっているが、英語、プログラミングなどの学習に押し出されて減っている。一方、都市部の先生は、体験が一番重要として外していかない。親も理解がある。お金を出してでも参加させる。
- ・中丹以南はほぼ宿泊体験を行い、丹後にたくさん来ている。田舎と都市部では教員や親の自然体験についての理解に差がある。
- ・学校の教育課程内での自然体験活動は、天候に左右されることもあり、時間数確保に苦慮する。そういったことが自然体験の減少につながっているのかもしれない。
- ・公民館事業の参加人数に目を向けると、教師の体験活動に対する理解の差が参加への呼びかけの差になっている。

(2) 大人に意識変容を求めたいところ

① 環境設定

- ・青少年健全育成会主催の秋さがし探検で、生き物との共生に視点を置いた講師の言葉かけによって、子どもが主体的に学んでいた印象がある。そういった生きた活動を大人が仕組んでいかなければならない。
- ・体験活動に行かない人（経済面で参加できない人）をどう参加させていくのがよ

いのか。背中を押すしかけをどのようにつくっていくかが大切ではないか。

- ・丹後の子どもに体験活動が足りていないのであれば、小・中学校時代に体験活動の機会をつくる必然が生まれる。やはり地域の力と教育行政の役割に対する期待と責任が大きいのではないか。
- ・これからの時代は対話がないと断裂が生まれるのではないか。子ども達には対話スキルを身に付けて行ってほしい。子ども達には設定がある中での対話活動が必要。
- ・日常と非日常のバランスと、子ども達の探求心・衝動性を大切にする。大人が設定しすぎないように。
- ・民間・行政どちらの体験事業も、継続的にできる事業となるには、自然の中での活動に価値を見出せなければならない。

② 親の意識変容

- ・乳幼児期の子どもをもつ親に対して、どのような視点をもつことが、子どもを育てることにつながるのかを伝えていくことが大切であり、親の教育が必要ではないか。早い時期に子育てに対する親の意識が変容すれば、自ずと高学年・中学生時期にも好影響が波及していくのではないか。

(3) 体験活動が効果的に成長につながる時期はいつなのか。

- ・幼児期・低学年期のアプローチがあった上でのことであるが、「考える」体験という視点なら、大人に近い考え方で活動していく4年生からの活動が効果的か。
- ・乳児期には愛着形成、幼児期には活動を活発にし、低学年から主体的に学ぶ体験をすることで、中・高学年から対話のスキルが上がっていく。子どもの主体性を尊重することはずっと連続しているが、対話の質という点では中学年以上ではないか。

協議のまとめ

- ・効果的に自立へつながる体験⇒大人の環境設定の重要性と意識変容の必要性。
- ・協議対象の焦点化について⇒発達面で見ると小学校中学年以降がポイントになる。

5 指導助言（杉岡顧問）

学び方、遊び方、教え方を丹後で再定義できるように、空間や対話の関係性について焦点化していくということ。

- ・大人が作っている枠を外す

協議内容を振り返ると共通点は「大人が作っている枠を外す」。最大の焦点は、「枠を外してワクワクに」。我々大人が自然資源を最小化しているということを反省すべき。

- ・丹後の資源活用アイデア

《その1「越境学習」》

ホームがあることを前提として、アウェイでの体験をホームに持ち帰る。

例えば、広報活動が上手い近畿大学に出向した生駒市の職員が帰ってきて、そこの学びを市に還元する。効果は実証されており、大企業も行っている。

丹後の中でも越境学習できるのではないか。例えば、丹後の中でも雪が降っている地域と降っていない地域がある。それぞれの環境で学べることがある。その資源をホ

ームでどう活用するか。

《その2「親子修学旅行」》

丹後で親子修学旅行はどうか。親子が上下関係なくフラットに修学旅行を体験する。地域内留学も含めて大人も子どももごちゃまぜで体験する機会があってもいいのではないか。

・自立について

東京都の中学校での事例として、修学旅行や文化祭などの行事をすべて生徒に企画・運営させる中で、生徒が行事を創り上げる過程に「自立」を見取れる変化があった。結果として、学力も上がるなど、生徒の主体的な活動が学びにつながっていった。

・公教育の役割

学校教育を学ぶことは民主主義を学ぶことにつながっていく。ちゃんと揉めて、ちゃんと治める。この経験をさせないといけないのだが、その機会を奪っているのは大人ではないか。

・公民館の機能を捉えなおす

地域の中での居場所づくりの場としての公民館。地域の学校とは違う存在として、普段から誰もが利用できる場であるようにしなければならないのではないか。公民館の意義を再提起。

・AARという考え方（東京大学 牧野 篤教授）

A（アンティシペーション）：楽しみ

A（アクション）：行動

R（リフレクション）：振り返り

「楽しみ」から物事に入るものだが、それを奪っているのは親ではないか。

